

## 「JENESYS2.0」中国大学生訪日団第27陣

### 参加者の感想（抜粋）

○ ①日本の第一印象はきれいで清潔なこと。街角にゴミ箱はなく、清掃員を見かけることもない。こうした環境は、人々が自分でゴミを片づけ、きれいさを保つことにつながる。おそらく学校や家庭での教育、あるいは自治の精神で互いに気を付け合うことが、日本人のゴミの片付けや分別という習慣を培ってきたのだろう。あるいはいわゆる「しつけ」と言われる「人に迷惑をかけない」心がけだったり、些細なことだけれども大切な習慣だったりするのかもしれないが、考えさせられる事柄だった。

②「彼らも健常者と一緒ですよ。昇給にしろボーナスにしろ何も違いはありません。みんな同じです」。食品トレーの(株)茨城ピジョンリサイクル関東工場の方の言葉に私は感動した。障がい者雇用の場を見学できたことに感謝したい。「平等」と「自助のお手伝い」というソーシャルワークの核心に触れ、目の覚める思いだった。社会的弱者を支えるには、同情や憐れみなどではなく、相手への尊重や信頼に拠るべきであること、特別視するのではなく同じ目線に立つこと。それ自体が大切な一歩なのである。社会福祉を専攻する学生として私たちに課せられているのは、社会的弱者にさらなる特別待遇を与えることではない。彼らに社会的活動に関わる機会を作り、真の平等と尊重の実現を目指すことなのだ。

③「こんなひどいことになってしまったのは、誰のせいでもない、自分たちのせいだ」。関東港朝市協同組合を訪ね、映像資料を観て私は津波というものを初めて肌身で感じた。どうやら私たち両国には、時に理論と実践が噛み合っていないという事情があるようだ。それでも、自治や自助の精神、他人や政府を当てにするのではなく、自分で自分を守ること、人を守ろうとすることこそ、本当の意味での市民性ではないかと感じた。

○ 最も心に残ったこと：今回自分にとって最大の収穫は、長沼明教授による日本の社会保障制度に関するセミナーだった。教授は非常に理にかなった詳細な内容のパワーポイント資料を全員に配布してくださった上、大変充実した講義で、私たちは日本の社会保障システム全体についてよく理解することができた。そして最も感動したのは、ある学生の質問に対するご自分のお答えが不十分だったとして、翌日教授がわざわざ私たちの団に補足のお電話をくださったことだ。その真摯な姿勢にいたく感銘を受けた。

帰国してからのこと：一番に伝えたいのは、日本人が自分の仕事や生活にしっかり向き合っていることである。店舗も道路も塵一つないなど、中国はおろかアメリカでも見られない光景だ。日本人のモットーは「人に迷惑をかけない」。これはゴミに対する姿勢にも表れている。また、日本人は非常に自分の仕事を大切にし、礼儀正しい。スーツケースは託送のたび、私たちの到着時にはすでに部屋に運び入れてあったり、一人ひとりに「こんにちは」とか「さようなら」と声をかけてくれたりする。そして時間に几帳面だ。これは中国人にはほとんど真似できない。私が言いたいのは、中日両国の間には歴史や政治をめぐって多くの摩擦がある、しかし日本には私たちが学ぶべき点がたくさんあるということだ。民間の交流では、私たちはやはり友好的であるべきだろう。そうしてこそ互いの長所を学び合えるというものだ。

○ 8日間の訪問の中で最も印象深かったことといえば、(株)茨城ピジョンリサイクル関東工場の作業現場で見た光景だ。単なる環境保全というテーマを遥かにしのぎ、私たちの心により響いたのは、知恵と温かさに満ちた人としての思いやりだった。現場で働く人のうち80%が障がい者(自閉症や知的障がい者)ということだったが、それは決して特別な配慮からなどではない。彼らの持つ、健常者に勝るとも劣らない集中力という特性が、高い作業効率を生み出しているからなのだ。そしてこの会社は、彼らに平等な就業の機会を用意し、障がい者が自分の力で世の中を生きていけるよう、しかも人としての尊厳と誇りをもって暮らしていけるよう計らっている。知恵に満ちた、こうした人道的配慮こそが、社会福祉の真の姿ではないかと私は思う。

また、この会社の環境保全の理念も私たちが見習わなければならない点だろう。この日の訪問と最終日に見学した森ヶ崎水再生センターで学んだことは同じ理念だ。私たちはこれを中国に持ち帰り、共に成長していきたいと願っている。

○ 初めての日本、その最初の夜のオリエンテーション夕食会以降、私の心には一つまた一つと印象的な出来事が刻まれていった。

団員の中に数名飲食禁忌のある学生がいた。すると毎回食事の前には必ず注意深く特別な席やメニューが用意され、それはただの一度も怠ることなく続けられた。初日のバス内で通訳さんは「日本ではやたらあれこれルールを守るよう言われ、きっとみんな息苦しく感じることだろう」とおっしゃっていたが、私たちはついぞそんな感覚を覚えたことすらなかった。きっと日本側の細やかな気配りのお陰だと思う。私たちが感じていたのは、ただ優しさと温かさだけだった。

明治学院大学と東北福祉大学での福祉関連視察では、それぞれ異なった視点が用意されていた。児童福祉と高齢者福祉である。この2つの層は共に社会福祉における重要な研究対象だ。子どもの生存発達の保障や少年の非行防止と保護は中国とも多くの共通点があったが、その体制や運用は中国よりも進んでいた。高齢者の介護施設に関してはより感服させられた。先進技術を駆使し配慮の行き届いた浴室、静かで穏やかな環境と雰囲気、日々工夫された多彩な活動プログラムは言うに及ばず、私が最も感動したのは、そこで働くスタッフの態度だった。彼らは「ここにいらっしゃるお年寄り子どもではないから、あやしたりなどしてはいけない。人生の先輩方に接する態度で、相手を尊重してあげなければ。ここでは尊厳と誇りをもって暮らしてもらうのです」と言う。なんと貴い理念ではないか。

専門施設や制度面での見学や学習は今後改めて咀嚼し皆と共有すべき経験だったが、それだけにとどまらず、この国全体の環境や都市計画、公共施設の設計、そして国民の生活態度など、それら全てが私には忘れられない、他の人とも分かち合いたい印象的な事柄であった。

一期一会。8日間で私が得たものは知識と感動、そして残ったのは思い出と数々の笑い。ご縁があれば是非また会いましょう。

○ 来日前、私の知っている日本のイメージといえば、本やテレビ、ネット、そして人の話などから得たものに過ぎなかった。それなりにまとまった理解だったとは思いつものの、やはりどこか抽象的で偏っていたことは否めない。だが実際に日本を訪れ、一週間滞在して観察や見学をしているうち、立体的で多様な、そして愛すべき日本の姿が私の目の前に立ち上がってきたのだった。私はそんな日本の印象を中国に持ち帰り、家族や友人に紹介したいと思っている。

まずは、日本の都市環境や商品のデザインについて。来日後しばらくは陰鬱な雨が降り続いた。

ところが街も道もやはりきれいで清潔なままなのである。思うに、これは日本人の持つ高い環境意識が、それぞれの行動にまで浸透しているからではないか。また、日本の製品設計は創意工夫にあふれている。最も印象的なものといえばトイレの便器だ。科学技術と人への優しさが見事に融合している例である。

次に日本人から受けた印象について。交流は多くはなかったものの、日本人の礼儀正しさ、優しさ、細やかさなど、そのどれもが深く私の心に焼き付けられた。とりわけ、売場の店員さんやレストランのホールスタッフなど、サービス業に関わっている人々（一番接触の機会が多かった）は、ほんの些細なことにも親切に気を配ってくれ、人への優しさや礼儀、思いやりが感じられた。

日本の高等教育のあり方もまた非常に印象的だった。東北福祉大学では、理論的な学びと福祉施設内での実践とが結びついた教育モデルが確立されていた。これは、中国の理論ばかり重んじて実践を軽んじる現状を考えると、参考とすべき点ではないだろうか。学生たちが社会福祉制度と施設についてよりしっかり把握できるよう、我が校がこうした実践の機会を与えてくれることを私も切望してやまない。

最後に触れておきたいのは、今回の訪日テーマでもあった日本の社会福祉についてである。明治学院大学松原学長による児童福祉制度の紹介、浦和大学の長沼明教授による日本の社会保障制度に関するセミナー、(株)茨城ビジョンリサイクル関東工場の障がい者雇用、あるいは東北福祉大学における仏教理念と社会福祉の融合、そして人心の訓練とその育成、福祉の制度設計時の人的要素の重視など、これら全てが、私に社会福祉と社会保障について新たな理解と気付きをもたらしてくれた。こうした見聞きしたことや感じたことを中国に持ち帰り、先生や同級生たちとも分かち合いたい。

日本で過ごしたこの数日間、上記の4点だけではなく、実はもっとたくさんの小さな出来事や感想があったのだが、紙幅の関係から最も印象深かった部分のみを記した。日本訪問ではいろいろ思うところが多く、大変勉強になった。今後機会があれば、私は必ずまた日本に勉強しに来たいと思っている。

○ 1. 東日本大震災からの復興状況について。強く印象に残っているのは、大地震に関する説明と発災時の情景、被災状況の分析であり、震災後の反省と総括、政府・国民の防災意識の高まりであり、かつて災害への油断と防災業務に手落ちがあったことを認め、理性的かつ客観的に今の状況に向き合っていることだった。最も心を動かされたのは、こうした震災をくぐり抜け生き残った人々が、今では語り部やスタッフとして、人々の防災意識の啓発のために自ら力を尽くそうとする姿だった。本当に胸を打たれた。彼ら記憶の継承者に、深い感激と尊敬の念を覚えずにはいられない。

2. 現代的な文化と伝統文化の見事なまでの融合。浅草寺では、着物を着た若い人たちが写真を撮っている様子がとても美しく、若者の伝統的な装いへの愛着に感嘆させられた。また東北福祉大学では、座禅が新生の必修科目だと聞いて非常に驚いた。同時に、こうした中国発祥の文化をなぜ私たちはこのようにきちんと受け継いで来られなかったのかと自問せずにはいられなかった。

3. 日本人はとても礼儀正しい。職業や年齢を問わず、彼らのやることなすこと、毎回の触れ合いの中にそれが感じられ、とても心地良かった。日本人にはすでにこれが普段の習慣となっているのだろう。

4. 日本の福祉制度は、障がい者や高齢者の尊厳に十分な配慮がなされていた。福祉の世話になる羞恥心をなるべく和らげたり、中国同様、日本にも存在する福祉のスティグマ（汚名の烙印）を極力回避する努力が払われたりしていた。

5. 時間遵守の気風、仕事へのきちんとした姿勢、完璧へのこだわりなど、日本人には良い印象を持った。

○ 今回の訪日で私の心に最も強く残っているのは、日本人の東日本大震災を経てからの反省と総括、そして復興のことだった。

まずは日本の国民について。地震や津波に襲われた時、人々は往々にして逃げ惑い、助けも得られない。しかしその一方、時に善意と勇気が示されることもある。記録映像に映っていた、人を助けようとして最後は自分も津波に飲み込まれてしまうあの勇気ある赤い人影。また、津波が引いた後の瓦礫と廃墟を前に、人々が示した強さと責任感。私はこのことに深い感動と尊敬の念を覚えた。涙を流しながら亡くなった家族や友人を掘り起し、故郷を再建し、自然を取り戻す。そして昔を思い、震災の記憶をとどめ、振り返るのだ。「この災害を大きくしてしまったのは日本人自身だ」と。防災施設が万全でなかったこと、役人の職務怠慢、市民の油断を彼らは悔やむのである。だからこそ、世界に自分たちの教訓が伝えられることを彼らは願っている。同じ悲劇が二度と再び繰り返されないように。

次に防災教育の重要性について。防災教育というのは大変な困難を伴う。しかしそれは人類の発展と福祉の確立に関わるものだ。かつての日本と同様、中国でも多くの地域で防災教育が形式的なものに墮している。誰もこれを重視せず、多くの関連施設が不完全なままか、所によっては建設すらされていない。今回被災者の方が語った、防災教育の責任は学校にある、教師にある、との言葉を私は忘れないだろう。また民間の組織も具体的な対応を進めるために何か役に立てるのではないかとも考えている。

ともあれ、今回感覚的にも理性の上でも、私はこの分野についてより深く知ることができた。今後この面での研究を進め、人々の幸せに資することができればと思う。

○ 来日してまもなく、とても印象的だったのは、日本のサービス業に関わる人々の我慢強さと礼儀正しさだった。たとえば、バスのドライバーは皆がバスに乗り込む際、一人ひとりに微笑みながら挨拶してくれたし、ホテルに到着した際には私たちのスーツケースを取り出しては一つひとつ丁寧に並べた上、持ち手までをも伸ばしてくれていた。道端やお店で出会う、品があつて常に笑みをたたえた人々のことなど、もう改めて取り上げるまでもない。

浅草寺を見学した時、私はすでに日本と中国の違いに気付いてしまった。修復を終えた浅草寺は、色鮮やかで美しく荘厳だったし、「みやげもの通り」とも言うべき仲見世は多くの人でごった返し、相変わらずにぎやかだった。翌々日、今度は茨城県の結城紬の手織り工房を訪れた。結城というこの小さな町には、全国にその名を知られる古い伝統産業が今も息づき、現代社会にあつてなお、変わらぬ温かで艶やかな光を放っている。中国では、古くなった街区を取り壊し、歴史建築を模した町並みに建て替えるかどうかの難しい選択に直面する所が少なくない。日本のこうした経験が参考になるのではないだろうか。

明治学院大学では、学長から日本の児童福祉と社会保障システムに関する講義をして頂いた。一番印象的だったのは、日本における民間の社会団体の存在だった。とても先進的で緊密に連携の取

れた団体が、新たな社会問題に対する人々の関心を呼び込む際にも、そして実際に福祉的措置が採られる際にも、果ては役所やその他の団体の業務内容を監視する際にも、非常に大きな役割を果たしていた。対して中国では、今年9月初めに『中華人民共和国慈善法』が正式に施行され、様々なNPOの取り組みにより法的な定めが与えられたばかりである。帰国後私たちが見るべきこと、なすべきことは依然としてたくさんあるように思う。

ところで、今回最も心に残ったのは(株)茨城ピジョンリサイクル関東工場だった。そこで目にしたのは、企業としての利益追求と社会的公益性とのバランスに優れ、社会的責任を果たさんとする現代企業の調和と進歩だった。また私は、普段日本の人々は使い終わった食品トレーをきれいに洗った後、スーパーなどの回収箱に入れていることを、ここで知った。日本の各家庭は、ゴミの分別や環境保全のため中国の何倍もの家事負担を引き受けているのである。私たちが見習い、習慣付けていかねばならないことは多い。ある面では私たちはきつともっとうまくやれるだろうし、やらなければいけない。だが、それにはまず、この彼我の差に目を凝らし、知ることから始まるのである。

○ 今回のプログラムに参加するまでは、日本や日本人への理解は、ただ本や映像作品の中だけに限られており、島国でありながら日本がここまで経済発展を遂げたことを不思議に思っていた。しかし、来日してこの国を知るにつけ、日本人の真剣に物事に取り組む姿勢に感服した。また、どの分野の業界であれ、急速に進歩している感じが感じられた。

9月23日、私たち農業分団は東北大学農学部を訪れ、模擬授業を受けたり、日本の学生と学術的なプレゼン交流をしたりして、日本の大学における農業研究について理解を深めた。日本では国情に合わせ、水稻に関して詳細で深い研究が進んでおり、学ぶことが多かった。

○ 今回の訪日で最も印象的だったことは、日本の環境保全と省エネ意識である。日本は島国で資源に乏しい。ところが、1人当たりの資源占有量がとても少ないにもかかわらず、この国の最先端科学技術力と製品の製造、そして便利な生活設備は世界トップレベルである。これは、全て日本人の体に染み付いた節約と環境意識のなせるわざにほかならない。街角でゴミ箱を見ることはほとんどないが、それでもとても清潔だ。人々は意識して自分のゴミは持ち帰っているし、それを細かく分別することも求められる。

落合水再生センターでは、日本の汚水浄化基準値が非常にシビアであること、オフィスエリアでは2種類の水循環システムを導入し、低レベル処理水をトイレの洗浄や清掃等に用いることで処理コストを抑えていることを知った。また住宅地では、水道の使用量に応じた下水道料金が徴収されており、節水を促すしくみになっていた。

東京都の人口の多さからすると、家庭で保有されているマイカーの数は相当数にのぼる上、道路の幅も総じて狭い。ゆえに車で出掛けるのは不便だと思われるのだが、私たちの乗ったバスの運行はほぼいつもスムーズだった。これには公共交通機関の利用を積極的に促している日本の都市政策と、交通ルールを遵守しているドライバーに感謝すべきであろう。

環境保全と省エネは単なるスローガンであってはならない。それが日々の行動に表れなければ意味がないのだ。そして当局による管理監督は必ずや公開を原則とし、透明かつ厳格であるべきだ。それによって人々の行動は正しく規制され、自然と意識が形作られていくのである。私もまた、自分自身から始めてみようと思う。身近な人々にまず呼び掛けるのだ、環境を守り資源を大切にしよう、と。

○ 日本では路上でしばしば見られるのが、車両が歩行者に道を譲り、クラクションを鳴らすことなく静かに待っている光景である。公共の通行場面における秩序と譲り合いがそこにある。また、学会会議や商談会などで使用される椅子の脚には皆キャスターが付いており、椅子を引く音を防ぐ工夫がなされていた。まさに知恵と科学だ。柏の葉スマートシティでは、屋外の光を集め、室内の照明に利用している例を見たが、ここにも日本人の天然資源を大切に、存分に活用する意識と知恵が感じられた。

ふゆみずたんぼ（冬季湛水水田）の視察では、人と自然が調和する生きた事例を知った。雁の越冬のため、稲を刈り取った後の田んぼに水を張り、冬の間を生息地とするのだ。しかも雁たちが地面にこぼれた糞をついばむ際の安全にも配慮し、田んぼには農薬を使わない。この農法により、ここは有名な観光地となり、有機栽培米には良い値がつくというのだから、まさに一举三得である。

松島の遊覧船では、語り部のお話を聴いたり質問をしたりした。特別な体験だった。地震と津波のもたらす悲惨さは筆舌に尽くし難い。だが、日本では広く避難教育が行われている。お話を聴く限り、発災時には人々は恐怖に慌てふためくのではなく、落ち着いて効果的な対応を採るといふ。災害の緊急時、救助の機会は限られ時間も差し迫る中、全ての命が平等に助かるには、「津波でんでんこ」（自分の命は自分で守れ）の教えこそ、最適な避難方法なのである。災害は過ぎ去った。だが日本の人々は今でも援助の手を差し伸べてくれた人たちへの感謝を忘れない。そして避難方法について体験を共有しようとしている。皆が笑顔で毎日を送れるように、災難が降りかからないようにと切望しながら。

○ プログラムに参加するまで日本や日本人について知っていることはさほど多くはなかった。科学技術が発達していること、電子産業やアニメ産業が世界をリードしていることくらいだ。訪日後、本当の日本を知った。人々はまじめで細やか、そして恥ずかしがり屋で優しく善良だ。都市化の進展は深刻ではあるが、田舎もきれいで清潔だった。

日本ではその自然条件と社会的条件により、農地の耕作面積は狭く、農家の経営規模も小さい。しかし一つひとつの農地は極限まで活用され、土地の利用率と単位面積当たりの生産量は最高水準である。また農家は土地の所有権を有し、これを相続することもできる。国は一連の対策によって、耕作放棄地の増加を抑え込もうとしている。

○ 今回の訪日で最も印象的だったのは、日本の田舎の環境のすばらしさ、そして人々の優しさと礼儀正しさだった。さらには農業分野での科学研究、先端テクノロジー、オートメーション化された工場生産、人の手による文化的な景観など、そのどれもが私の心に強く焼き付いている。

このうち特に強調したいのが、日本の農村についてである。農村の現状がどうであるかが、その国の発展と近代化の度合いを、ひいてはその国の社会が露呈する問題を、実は最もよく反映していると思うからである。日本の農村はすばらしい環境だった。農家の家屋は小ざっぱりと清潔で、緑の山々や清らかな流れに、まさに帰るのを忘れるほどだった。農業生産においては、ただひたすら経済効率と利益を追い求めるのではなく、生態系への影響にも配慮した農法は、他国の手本となり得るものである。

また、日本人はとても礼儀正しい。ある日の買い物で、私たちの欲しかったものがその店にはなかった時のことだ。なんとその店員は自ら私たちを連れ、その商品を置いてあるほかの店を探し

出してくれたのだった。日本の人々の優しさと善意に、私はここで改めてお礼を言いたい。

今回のプログラムでは、日本の科学技術、文化、自然について深く知ると共に美しい景色も楽しむことができた。帰国後は日本で見聞きした本当のことをそのまま家族や友人に伝えようと思う。また中日の友好にも貢献していきたい。両国のますますの発展を心から願っている。

○ 今回の訪問で、私は日本と日本人のことを肌身で知ったように思う。ぎっしり詰まったこの8日間は楽しく充実したものだった。きっと良い思い出になるだろうし、それまで日本のことや日本文化について大して興味もなかった私が、今では続けてもっと勉強したいと強く願うほどである。

日本に到着してすぐの頃、私は日中友好会館と旅行社のスタッフの優しさに胸を打たれたのだが、その後も彼女たちは終始仕事熱心で、我慢強く、懸命に一つひとつの日程に取り組んでくれた。私の心はいつも幸せだった。

8日間ではあったが、プログラムは実に多彩で、たくさんの体験ができた。農林水産省の講義では、日本の農地制度改革とその推移、露呈した問題とその解決策など、啓発された部分が多かった。また中国同様、人口の高齢化問題が顕著となり、これが農業生産におけるネックとなっていること、自然災害の被害に悩まされていることなどを知った。確かに中国と日本は価値観や習慣、食生活などに違いはあるものの、一致する部分はきつともっと多い。みんなの願う幸せのために、私たち若い世代が手を携えて問題の解決に努力していかなければと思う。

あと少し増やすべきは交流であり、もう少し減らすべきは誤解。私たちがやらなければならないのは肌身で体験すること、心で感じることであって、根拠のない受け売りなどではないはずだ。日本人の時間に対する几帳面さ、ルールの遵守、礼節を重んじること、人に迷惑をかけないこと、相手を思いやり自分のことも大切にすること、環境意識の強さなど、私たちが見習わなければならない点が多い。だから若い世代の一人として、まずは自分の身近な人たちに伝える義務と責任が私にはある。私たちに必要なのは、違いを認めながらも共通点を探っていくこと、もっと学び合い、触れ合い、共に前へ進んでいくことなのだ、と。

○ 1. 日本では企業の社会的貢献が重視され、それぞれの企業が一定の責任を担うよう求められている。社会科見学や教育などもその一つだが、これは小中学生のやる気や能力を高めたり、社会や環境について正しい認識を育んだりする上で大きな助けとなる。例えば水再生センターの見学を通じ、子どもたちは油汚れを下水道に流してはいけないなど、家庭での正しい排水処理の方法を身に付けるだろうし、やがてそれは国民全体のレベル向上にも大いに役立つはずである。

2. 日本では生態環境の保全が大変重視されている。普段の生活においてもゴミの分別処理システムが確立されており、国民も分別の大切さをしっかりと自覚している。今回、科学研究機関として2か所の大学を訪問したが、共に生態環境分野での研究に重きが置かれていた。千葉大学のスマートシティ、東北大学で行われている、冬の渡り鳥に適切な越冬生息地を供するためのふゆみずたんぼ（冬季湛水水田）の例などである。他にも、私たちが視察したワタミ（株）など森づくりに取り組む企業もあった。研究機関から企業、そして市民に至るまで、一人ひとりが生態環境をこんなにも大切にするのは決してたやすいことではない。また、日本人の中国人に対する優しさはなかなかのものだった。私が出会った日本の人々は、店のスタッフから道行く人まで、私が尋ねたことには皆何とかして協力しようとしてくれた。本当に感謝している。